



6 7 8 9 110 1 2 3 4 5 6 7 8 9 120 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4

昭和六十三年三月

各務原市資料調査報告書第九号

慶応二・三年兵賦出府日記

各務原市歴史民俗資料館

慶応二・三年兵賦出府日記

序

ここに『各務原市資料調査報告書』第九号として、「慶応二・三年兵賦出府日記」を刊行できますことを、誠に喜ばしく思います。

「慶応二・三年兵賦出府日記」は、坪内嘉兵衛昌寿が軍役銃手を率いて江戸へ出府した折に、随行した用人永井弘衛が書き留めたものです。嘉兵衛昌寿家は旗本坪内氏の内分分知家の一つで前渡村に居住しており、永井家はその譜代の家来でありました。嘉兵衛昌寿一行は、慶応二年十月十九日に前渡を出発し、東海道を下り江戸に赴きます。そして翌慶応三年五月二日に江戸を発ち、五月十日に清洲に到着します。日記にはその間のこと記されており、江戸滞在中のできごとや、幕末の社会の様相の一端を窺い知ることができます。

本書が市民の皆様をはじめ、多くの方々に活用していただければ幸いです。このような古記録に親しむことが、文化財を大切にし文化の香り高い都市づくりへの一助となり、また将来にわたって役立つことを願ってやみません。

おわりに本書を発行するにあたり、御協力御尽力下さいました資料所蔵者をはじめ、関係の方々に厚く御礼申し上げます。

昭和六十三年三月

各務原市教育長

水 野 定 之

慶応二・三年兵賦出府日記

目次

序

凡例

慶応二年

| | |
|-------|---|
| 十月十九日 | 一 |
| 十月廿日 | 一 |
| 十月廿一日 | 二 |
| 十月廿二日 | 四 |
| 十月廿三日 | 五 |
| 十月廿四日 | 四 |
| 十月廿五日 | 五 |
| 十月廿六日 | 七 |
| 十月廿七日 | 七 |
| 十月廿八日 | 七 |
| 十月廿九日 | 八 |
| 十月 晦日 | 〇 |
| 十一月朔日 | 一 |
| 十一月二日 | 一 |

| | |
|--------|----|
| 十一月三日 | 一二 |
| 十一月四日 | 一三 |
| 十一月五日 | 一四 |
| 十一月六日 | 一五 |
| 十一月七日 | 一六 |
| 十一月八日 | 一九 |
| 十一月九日 | 二〇 |
| 十一月十日 | 二一 |
| 十一月十一日 | 二一 |
| 十一月十二日 | 二二 |
| 十一月十三日 | 二三 |
| 十一月十四日 | 二五 |
| 十一月十五日 | 二五 |
| 十一月十六日 | 二六 |
| 十一月十七日 | 二七 |
| 十一月十八日 | 三〇 |
| 十一月十九日 | 三一 |
| 十一月廿日 | 三一 |
| 十一月廿一日 | 三二 |
| 十一月廿二日 | 三三 |
| 十一月廿三日 | 三三 |
| 十一月廿四日 | 三四 |

| | |
|--------|----|
| 十一月廿五日 | 四〇 |
| 十一月廿六日 | 四一 |
| 十一月廿七日 | 四六 |
| 十一月廿八日 | 四七 |
| 十一月廿九日 | 四七 |
| 十一月 晦日 | 四八 |
| 十二月 朔日 | 五一 |
| 十二月 二日 | 五二 |
| 十二月 三日 | 五四 |
| 十二月 四日 | 五五 |
| 十二月 五日 | 五五 |
| 十二月 六日 | 六一 |
| 十二月 七日 | 六二 |
| 十二月 八日 | 六三 |
| 十二月 九日 | 六四 |
| 十二月十日 | 六五 |
| 十二月十一日 | 六五 |
| 十二月十二日 | 六六 |
| 十二月十三日 | 六六 |
| 十二月十四日 | 六六 |
| 十二月十五日 | 八五 |
| 十二月十六日 | 八六 |

| | |
|--------|----|
| 十二月十七日 | 八七 |
| 十二月十八日 | 八七 |
| 十二月十九日 | 八八 |
| 十二月廿日 | 八九 |
| 十二月廿一日 | 八九 |
| 十二月廿二日 | 九〇 |
| 十二月廿三日 | 九〇 |
| 十二月廿四日 | 九一 |
| 十二月廿五日 | 九二 |
| 十二月廿六日 | 九三 |
| 十二月廿七日 | 九三 |
| 十二月廿八日 | 九四 |
| 十二月廿九日 | 九五 |
| 十二月大晦日 | 九六 |

慶応三年

| | |
|-------|----|
| 正月 元日 | 九八 |
| 正月 二日 | 九九 |
| 正月 三日 | 〇〇 |
| 正月 四日 | 〇〇 |
| 正月 五日 | 〇一 |
| 正月 六日 | 〇九 |

| | |
|-------|-----|
| 正月 七日 | 一〇九 |
| 正月 八日 | 一一〇 |
| 正月 九日 | 一一〇 |
| 正月十日 | 一一〇 |
| 正月十一日 | 一一一 |
| 正月十二日 | 一一二 |
| 正月十三日 | 一一二 |
| 正月十四日 | 一一二 |
| 正月十五日 | 一一三 |
| 正月十六日 | 一一三 |
| 正月十七日 | 一一四 |
| 正月十八日 | 一一四 |
| 正月十九日 | 一一五 |
| 正月廿日 | 一一五 |
| 正月廿一日 | 一一六 |
| 正月廿二日 | 一一六 |
| 正月廿三日 | 一一七 |
| 正月廿四日 | 一一七 |
| 正月廿五日 | 一一八 |
| 正月廿六日 | 一一九 |
| 正月廿七日 | 一一九 |
| 正月廿八日 | 一二〇 |

| | |
|-------|-----|
| 正月廿九日 | 一一一 |
| 二月 朔日 | 一一三 |
| 二月 二日 | 一一四 |
| 二月 三日 | 一一五 |
| 二月 四日 | 一一六 |
| 二月 五日 | 一一七 |
| 二月 六日 | 一二七 |
| 二月 七日 | 一二八 |
| 二月 八日 | 一二九 |
| 二月 九日 | 一二九 |
| 二月十日 | 一三〇 |
| 二月十一日 | 一三一 |
| 二月十二日 | 一三一 |
| 二月十三日 | 一三二 |
| 二月十四日 | 一三二 |
| 二月十五日 | 一三二 |
| 二月十六日 | 一三三 |
| 二月十七日 | 一三四 |
| 二月十八日 | 一三四 |
| 二月十九日 | 一三五 |
| 二月廿日 | 一三六 |
| 二月廿一日 | 一三六 |

| | |
|-------|-----|
| 二月廿二日 | 一三六 |
| 二月廿三日 | 一三七 |
| 二月廿四日 | 一三七 |
| 二月廿五日 | 一三八 |
| 二月廿六日 | 一三八 |
| 二月廿七日 | 一五四 |
| 二月廿八日 | 一五四 |
| 二月廿九日 | 一五五 |
| 二月三十日 | 一五六 |
| 三月 朔日 | 一五九 |
| 三月 二日 | 一五九 |
| 三月 三日 | 一六〇 |
| 三月 四日 | 一六〇 |
| 三月 五日 | 一六一 |
| 三月 六日 | 一六一 |
| 三月 七日 | 一六二 |
| 三月 八日 | 一六三 |
| 三月 九日 | 一六四 |
| 三月十日 | 一六五 |
| 三月十一日 | 一六五 |
| 三月十二日 | 一六七 |
| 三月十三日 | 一六七 |

| | |
|-------|-----|
| 三月十四日 | 一六七 |
| 三月十五日 | 一六八 |
| 三月十六日 | 一六九 |
| 三月十七日 | 一六九 |
| 三月十八日 | 一七〇 |
| 三月十九日 | 一七一 |
| 三月廿日 | 一七二 |
| 三月廿一日 | 一七二 |
| 三月廿二日 | 一七三 |
| 三月廿三日 | 一七三 |
| 三月廿四日 | 一七三 |
| 三月廿五日 | 一七三 |
| 三月廿六日 | 一七四 |
| 三月廿七日 | 一七四 |
| 三月廿八日 | 一七四 |
| 三月廿九日 | 一七八 |
| 四月 朔日 | 一八一 |
| 四月 二日 | 一八一 |
| 四月 三日 | 一八二 |
| 四月 四日 | 一八二 |
| 四月 五日 | 一八四 |
| 四月 六日 | 一八五 |

| | |
|-------|-----|
| 四月 七日 | 一八六 |
| 四月 八日 | 一九一 |
| 四月 九日 | 一九二 |
| 四月十日 | 一九三 |
| 四月十一日 | 一九四 |
| 四月十二日 | 一九五 |
| 四月十三日 | 一九六 |
| 四月十四日 | 一九六 |
| 四月十五日 | 一九七 |
| 四月十六日 | 一九七 |
| 四月十七日 | 一九八 |
| 四月十八日 | 一九八 |
| 四月十九日 | 一九九 |
| 四月廿 日 | 一九九 |
| 四月廿一日 | 一九九 |
| 四月廿二日 | 二〇〇 |
| 四月廿三日 | 二〇〇 |
| 四月廿四日 | 二〇〇 |
| 四月廿五日 | 二〇一 |
| 四月廿六日 | 二〇三 |
| 四月廿七日 | 二〇三 |
| 四月廿八日 | 二〇四 |

| | |
|-------|-----|
| 四月廿九日 | 二〇五 |
| 四月晦日 | 二〇五 |
| 五月朔日 | 二一〇 |
| 五月二日 | 二一一 |
| 五月三日 | 二一一 |
| 五月四日 | 二一二 |
| 五月五日 | 二二四 |
| 五月六日 | 二二四 |
| 五月七日 | 二二五 |
| 五月八日 | 二二五 |
| 五月九日 | 二二七 |
| 五月十日 | 二二七 |

积文

編集後記

千支早見表

凡 例

一 本報告書は、旗本坪内氏の内分分知家の一つである前渡の坪内嘉兵衛昌寿が江戸に出府した際、同行した用人の永井弘衛が記録した日記を活字化したものである。

一 原史料は、前渡西町の富樫優王氏から、各務原市歴史民俗資料館に寄託されたものである。

一 収録にあたっては、できるだけ原本に忠実になるように努めたが、漢字は原則として「常用漢字表」に基づき、また古体・異体・略体文字は現行正字体に改めた。また、助詞は原則としてかなに統一した。

一 虫損等により判読が困難な場合は、その字数を□で示し、字数の推定が不可能な場合は、□ □ で示した。

一 読みやすくするため、本文中に適宜読点「、」を付した。

一 史料の判読および校正等は、歴史民俗資料館学芸係長齋藤文彦、同係員宮崎憲二・畑佐かやの、同嘱託佐藤浩子・星野文子・辻佳子が担当し、岐阜大学松田之利教授にご指導いただいた。

一 友川者美也桂卿方河

古下之林

一 世夜焉降了覽七所河

一 吉田者向金協也 和由夜河の事大行柳治河使也

一 吉田河は言新造夜河邊にありて新吉河に收りて河

一 吉田河は言新造夜河邊にありて新吉河に收りて河

一 吉田河は言新造夜河邊にありて新吉河に收りて河

一 吉田河は言新造夜河邊にありて新吉河に收りて河

一 荒井者紀國也八半河河之創に遊河河河河河

河河河河

世

右之之役也

作内方之

之

作初自流... 士言南人... 教... 南... 十九... 在... 所... 所... 江... 委... 上... 自... 著... 号

卷之二 高年十月十九日

作内方之

國

作内方之

山

右之通之先例之通之

一 紀國を断る月夜、梓内村を宿し、南河内國新庄村
川を渡り、龍崎村に到り、人数を計りて、
一 宿に宿り、龍崎村に到り、

正丁之林大風

一 日坂高松や、川河、馬場、三輪、若菜、上野、宮内、送是

正丁之林

一 夜川、龍崎、信濃、川、河、内、村、宿、し、て、
川、河、内、國、新、庄、村、に、到、り、
川、河、内、國、新、庄、村、に、宿、し、て、
川、河、内、國、新、庄、村、に、宿、し、て、
川、河、内、國、新、庄、村、に、宿、し、て、

少くも此の法を以て其の旨を以て其の旨を以て

此

持田の如く

之りて

右の如く

作あり流少く主を南人殺す是江三在る日其下り以て

于 即 國 新 平 亦 遠 所 通 亦 あり 為 後 け 以 ち

慶應三年十月十九日

持田の如く

箱根

即 國 新

以 善 人 中

右三例ノ通テ先例トナリ
右三例ノ通テ先例トナリ
右三例ノ通テ先例トナリ
右三例ノ通テ先例トナリ

右三ノ通テ

一 右三例ノ通テ先例トナリ
一 右三例ノ通テ先例トナリ
一 右三例ノ通テ先例トナリ
一 右三例ノ通テ先例トナリ

右三ノ通テ

一 川崎島紀西ヤ右三例ノ通テ

右三ノ通テ

たし勝財は身変分らりぬ未嘗く私法を脱らし誠意有
り事と成縁は身法くくして此の申らりぬ一切を以て
善業成るなり

一 令書近 伊豆守格 一 令書近 右方守格

勅物係係 勅書守格

一 令書近 知得守格 一 令書近 伊勢守格

宮の御三所が勅書係 宮内御三所係
于勅書

一 令書近 中務守格

于勅書

一 令書近 右方守格 一 令書近 少輔守格

一 令西信廷 彦夜 環互 一 令西信廷 山内信之

一 令吉原 天野從七而之一 令吉原 飯割次

一 令吉原 山内信之 天野從七而之一

山内信之

一 令西信廷 彦夜 環互 一 令西信廷 山内信之

山内信之 彦夜

一 令西信廷 山内信之

十一月朔辰丑

一 四附
少礼

令之而極其南方極其少

一 十月而自之及之流至其方内候之少禮

自

乙巳

一 屬極其田所之所自田島其少禮

一 流極其田所之所自田島其少禮

一 令之而極其少禮

一 軍八市田島島海船之海軍

四、未定

一 伊豆之牙橋河定

一 楠木河定 船務 合之河定 河定河定河定

一 船務河定河定河定河定河定

一 天野河定河定河定

一 船務河定 平島河定河定河定河定

一 船務河定河定河定河定

一 船務河定河定河定

一 軍八市田島島海船之海軍

一 秘名古抄名軍八の始末

入目申候

一 田島甚七右衛門軍八の侍と明吉の尉と此の始末事候
四段の書之 平治源平の事候月令文書成事候
河津一之河津の事候事候

一 源頼朝 治承水天宮の事候事候
河津の事候事候

一 方方

仔細之書候事候

源頼朝

平山源朝

三月三日 夜九時 江戸

一 大坂 急行電車

三月五日 舟

一 船橋 江戸橋 船客 天明 船橋 江戸 供養 舟 江戸 船客

船客 船橋 江戸

一 船橋 船客 天明 船橋 江戸 供養 舟 江戸 船客

江戸 船客 天明 船橋 江戸 供養 舟 江戸 船客

一 船橋 船客 天明 船橋 江戸 供養 舟 江戸 船客

船客 天明 船橋 江戸 供養 舟 江戸 船客

一 船橋 船客 天明 船橋 江戸 供養 舟 江戸 船客

船客 天明 船橋 江戸 供養 舟 江戸 船客

船客 天明 船橋 江戸 供養 舟 江戸 船客

一 時五五換台流少く、今来の湯水は、通て去る分南を
 二 爲り、北に流るる部、分令と云ふ力は、是の代に、子能代令と云ふ
 三 部、流す身、今、今、當り、此、部、及、下、等、を、文、付、た、り、と、お
 四 後、久、可、枝、持、来、り、目、と、云、ふ、は、む、を、云、ふ、也、今、云、ふ、は、他、部、を、部
 五 毎、南、東、の、部、令、と、云、ふ、は、一、部、と、云、ふ、也、
 一 地、部、は、今、云、ふ、也、

月明流地部打部和

一 南東夜玉

三ツ

一 夜火部和

二本

右一通一少自來自燒筒一業此以乃能後運

培
十月

坪因未

南

一 右品流炮洲修一

尾

友村

右一古先年
大納之

昔時公乾仕公且相命之勳中終之如炮制於瓶心者
世節者極行仕等可後去々々云々

培
十月廿七

倅因赤之家

者々通古德

所相家也少多不 所相家也信事書出矣

有是也少多也少多也

一 汝相軍人々々大皇初在宋之國台也少多

今之支事

一 國孫賴所之所自京之細練所之由之少多矣自後
之在孫之在受少留之在也大河系之在居之少多也孫賴

一 船橋 江橋 湯屋 湯屋 湯屋 湯屋

十日 十日

- 一 世及九之府 神田 湯所 湯所 湯所 湯所
- 一 船橋 道口 船橋 道口 船橋 道口
- 一 流下 抱入 小民 結交 文書 文書
- 一 宮川 三行 代人 久吉 上經 令之 湯屋 湯屋
- 一 船橋 湯屋 湯屋 湯屋 湯屋
- 一 湯屋 湯屋 湯屋 湯屋 湯屋

十日 十日

一 軍少くは福善寺出見

一 清浦は海河田也、其後不明、其後清浦村

に在り、其後遷移せし如きは、其後不明

一 小川は古氏、其後之令、其後之令、其後之令

一 氏新南、其後之令、其後之令、其後之令

一 信友、其後之令、其後之令、其後之令

一 由之、其後之令、其後之令、其後之令

一 久吉、其後之令、其後之令

十一了印

